

学校名	廿日市市立大野中学校
校長名	沖本 健治
所在地	廿日市市大野原四丁目 2 - 6 0
H P	http://academic2.plala.or.jp/ohnojhs/
学級数	8
タイプ	・

1 研究の概要

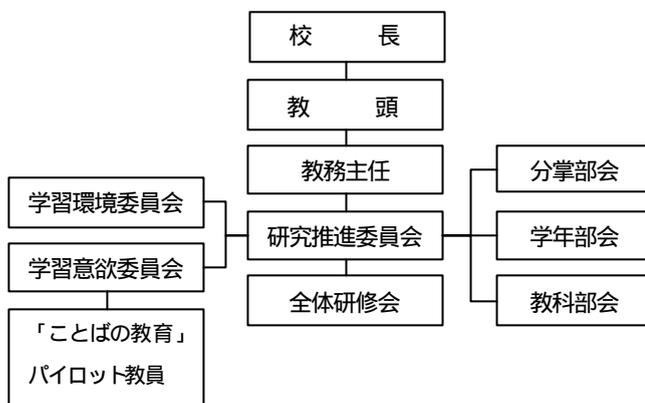
(1) 研究主題

言語技術指導を通じた論理的思考力とコミュニケーション能力の育成

(2) 研究のねらい

すべての教育活動において、全教職員が計画的・系統的に言語技術指導を行うことで、生徒自身が実感できるような、論理的思考力・コミュニケーション能力の向上を図り、さらに学力の向上につなげていく。

(3) 研究組織・体制



2 2年間の取組みの概要

平成17年度

各教科・領域で共通した取り組み

自分の考えを話したり書いたりする時は、「主語の明確化」「結論先行」「ナンバリングの使用」を心がけるよう指導した。

言語技術指導の導入

どの単元にどの言語技術指導の手法が活用できるか、研修・協議を行い、実際に授業の中に取り入れた。

指導案の工夫

身につけさせたい言語技術と言語技術取得のための具体的な手だてを明確にして、指導案を作成した。

平成18年度

言語技術指導についての指導計画作成

各教科等で、どの単元にどの言語技術指導を取り入れるかわかるように、指導計画を作成した。平成17年度は「受け答えの技術」の指導に偏りがちだったため、そうならないように、単元の特性や生徒の発達段階なども考慮に入れ、教科のねらいに即して、様々な言語技術指導が授業に取り入れられるようにした。また、他教科との関連も考えられるように一つの表にした。

言語技術を取り入れた授業実践記録の作成

言語技術指導を取り入れた授業の実践記録を作成し、交流を図った。

定期テストにおける論述問題の作成

すべての教科の定期テストにおいて、「筋道立てて考え、わかりやすく述べること」を求める記述問題を出題した。

出題例

- \* 「月に向かって、オオカミが(いなく ほえる)」この場合、不適切なのはどちらか。適切でない理由を明らかにして、文章で答えなさい。(3年 国語科)
- \* 金星と火星のうち、一晩中観測できるのはどちらか。その理由を説明しなさい。(3年 理科)

教師の指導技術の向上

授業研修だけでなく、演習や模擬授業を取り入れた研修を数回行い、全教職員が「様々な角度から物事を見る技術」や「情報を正しく伝える技術」「情報を的確に分析する技術」などの手法を指導できるようにした。

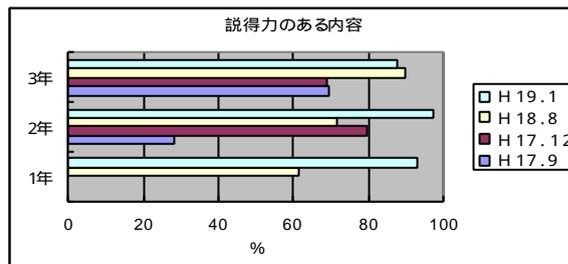
また、指導案作成の際には、「単元について」の「(3) 指導観」において、どの場面でどのように言語技術指導を取り入れるか、また、それを取り入れることで、「教科のねらい」がどのように達成されるのかを明記するようにした。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

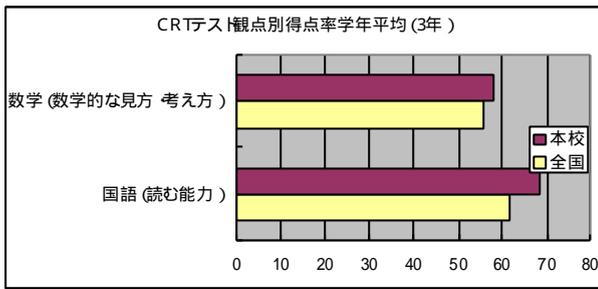
論理的思考力の向上

生徒は、授業、テスト、日常生活などあらゆる場面で、自分の考えに対する根拠を問われ、また、その根拠の内容に対して「事実に基づいているか」「論理の飛躍はないか」評価され、切り返されるので、その積み重ねによって「説得力のある話し方・書き方」ができるようになってきた。



平成17年度と平成18年度にそれぞれ2回ずつ、根拠を明らかにして自分の考えを述べる記述による実態調査を行った。それによると、前ページのグラフのように、説得力がある内容を書ける生徒の割合は、いったん減るものの、4回目の調査では、1・2年生は90%を超え、3年生もほぼ90%となった。3年生が低いのは、問われる内容が1・2年生よりも複雑になるためだと思われる。「第一人称を入れているか」「結論を先に書いているか」に関しては、どの学年もほぼ100%できている。

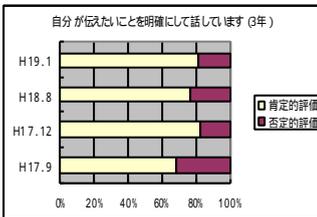
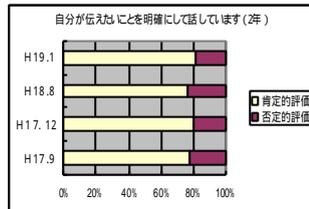
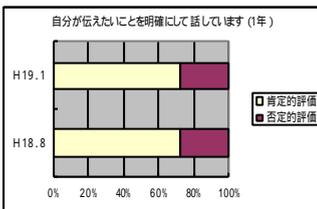
また、CRTテストの結果を見ると、国語の「読む能力」は、3年生では昨年度の得点率が全国平均の得点率より2.3ポイント上だったのに対して、今年度は7.0ポイント上回っていた。



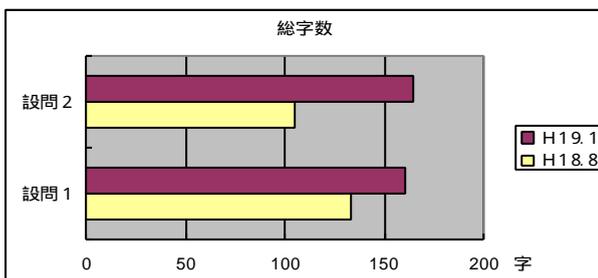
また、数学の「数学的な見方・考え方」の観点も、昨年度2.7ポイント下回っていたのが、今年度は2.4ポイント上回るようになった。2年生は、「読む能力」の観点はわずかに全国平均を下回っていたが、「書く能力」は3.1ポイント全国平均を上回り、国語科全体も全国平均を上回っていた。1年生は、全国平均より低かった。1年生は、「ことばの教育」の取り組みが他学年より短いのが原因だろうが、今後も発達段階を考慮に入れながら言語技術指導を行っていききたい。

### コミュニケーション能力の向上

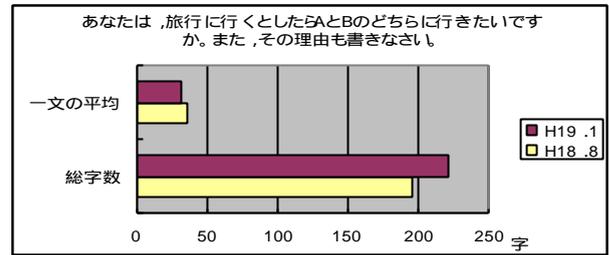
言語技術を指導することにより、この2年間でかなりわかりやすく話したり、書いたりすることができるようになった。



平成17年度、18年度、それぞれ2回ずつ「ことばの教育」に関する意識調査を行った。上のグラフにもあるように、「自分が伝えたいことを明確にして話しています」という項目にたいして肯定的に答えた生徒は、どの学年も最初に調査した時よりも増えており、2・3年生では、80%を超えた。それ以外の項目についても、ほとんどが、肯定的評価が増えている。生徒自身の意識だけでなく、実際に生徒が書いた文章も、より具体的でわかりやすくなってきている。平成18年度8月と1月に、ほぼ同じ課題で生徒に文章を書かせたところ、総字数は、下のような結果になった。すべての学年において、文章の量が増えていることが分かる。

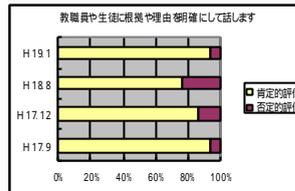
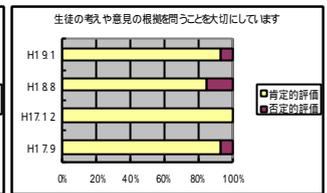
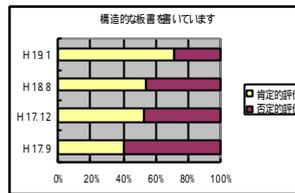


しかし、3年生で一文の平均字数を調べたところ、次に挙げるグラフのような結果になった。総字数は増えたが、逆に一文の字数は減った。一文一義を指導していたので、字数も減った上に、伝えたいことが明確になり、主述の照応ができるようになってきた。



### 教師の指導力の向上

「ことばの教育」に関する意識調査を見ると、ほとんどの項目で肯定的評価が増えた。



上のグラフのように、教職員のメンバーの入れ替わりにより年度が替わる時に一度肯定的評価が減るが、その後の調査では、肯定的評価が増えている。また、昨年度課題だった「構造的な板書を書いています。」の項目も、昨年度当初、肯定的評価が40%しかなかったのが、今年度最後の調査では約70%にまで増えた。

年間の言語技術指導計画を立て、演習を交えた研修を何度か行ったため、「受け答えの技術」以外の言語技術指導もできるようになった。また、定期テストに記述問題を取り入れたり、授業実践記録をまとめたりすることで、単なる型を教え込むのではなく、教科のねらいを常に意識しながら指導することができた。

### (2) 課題

演習や模擬授業の研修は何回も行ったが、十分とは言えなかった。特に、教職員のメンバーが入れ替わる1学期に研修の時間を確保したい。

タイプ の本校で「構成を考える技術(物語の構造)」や「要点をまとめる技術(再話)」を授業に取り入れるのは大変難しい。元々の手法を学ぶ機会を持つことができれば、授業の中に効果的に取り入れることができるであろう。

言語技術についての評価に対する全教職員の共通理解が不十分なため、生徒の書いた作品等の、言語技術における評価を全教職員が同じ基準で行うことがなかなかできなかった。評価に対する全教職員の共通理解を図るための研修が必要である。